

# 千秀だより

横浜市立千秀小学校

11月号

平成26年(2014)10月31日



辛いという蕾から、幸せという花が咲く

校長 市川 幸男

先日、1, 2年生の子ども達と江ノ島水族館に遠足に行きました。遠足の様子は、後のページで紹介致しますが、1年生と手を繋ぎ、懸命に自分の進むべき道を見通し歩く2年生の姿に、感心いたしました。1年生とたった1歳しか違わないのに、ずいぶんしっかりした姿が見られました。1年生を見つめる2年生の温かいまなざし、子ども達の進む道のポイントに、立っていただき、安全の見守りをしていただいたボランティアの保護者・地域の皆様のさらに温かいまなざし。本当にありがとうございました。

遠足の途中、ある子に、「校長先生って、何でも知っているんでしょう？」と聞かれました。突然の問いに、ちょっと驚きましたが、「そんなことは、ないよ。知らない事はいっぱいあるよ。」と答え、「だって何でも知っているのが先生で、その中でも校長先生が一番なんだから、いろいろなことを知っていると思う。」と言ってくれました。実にありがたい言葉ではありますが、反面、そう思われていると考えると少しプレッシャーを感じることもあります。そこで子どもには次のように言いました。「校長先生でも、知らない事はいっぱいあるよ。でもね、いっぱい知りたいという気持ちはあるし、知らない事はどんどん調べるようにしているのさ。君と同じように、校長先生も毎日勉強しているんだよ。」と話す、「校長先生も毎日勉強するんだ。校長先生、偉いね。」と褒められてしまいました。

学校にもどってみるといくつかのメールが届いておりました。その中に、「五風十雨ごふうじゅう」という言葉がありました。恥ずかしながら私はその言葉を知りませんでした。先ほどの2年生に「校長先生も勉強している。」と言ったこともあり、早速調べてみると、意味は、五日ごとに風が吹き、十日ごとに雨が降るというもので、植えた苗が順調に育つ豊作の兆しだそうです。また、世の中が平穏無事であることの例えとしても使われることが多いようです。ただ、苗の成長に雨が必要なのはよく分かるのですが、なぜ風が必要なのかと疑問に感じました。そこでさらに調べてみると、苗が、しっかりと根付いていないときに風が吹くと、倒れないように細い根が土の中で踏ん張るのだそうです。つまり、風が吹くたびに根は太くたくましくなり、養分を吸収していくようになるのです。言い換えれば、風が吹かないと、根はいつまでも細いままということになります。

ところで、このことは私たち人間にも言えるのではないのでしょうか。次の詩は、詩人・画家である星野富弘さんの作品です。修学旅行で行った富弘美術館で出会い、大好きになった詩です。

幸せという花があれば、その蕾のようなものだろうか、  
辛いという字がある。もう少しで、幸せになれるような字である。

かつて、「温室育ちの子どもたち」という言葉がありました。子どもたちには、恵まれた温室だけでなく、時には冷たく、強い風にさらされる環境が必要と考えます。冷たい風、すなわち試練こそがしっかりと大地に根を張るチャンスであり、人間性を高めて成長するチャンスでもあるのです。2年生の遠足の際、付き添って頂いたボランティアの皆様は、子どもたちを温かく見守りつつも、手取り足取りという支援はしない。子どもたちに問題に当たらせ、その行方を見守るという、子どもを高める素晴らしい接し方をして頂きました。冷たい試練・辛さを乗り越えた先には、幸せがある。という言葉に信じて、子どもたちに声援を送れる教師・学校でありたいといつも願っています。